～田中富雄のことば～

竹内紘子　　小説「捨身」より

葬列が斑鳩から竹ノ内へ、竹ノ内から峠を越えて磯長に着くまで、春雪は、まるで死者を慰撫するための散華のように降り続いてやむことはなかった。

山崎純世　　小説「捨身」より

推古帝二十八年の新しい年は、雪で明けた。大和は元々暑さ寒さの厳しい土地柄だったが、正月早々こんなにも積もったことは滅多になかった。

上窪則子　　交友綺談より

話自体には何ら文学性はないが、こういう交友関係の中から、古い言葉で言えば「葦牙(かび)の如萌(も)え騰(あが)る」ものが自ら生まれてくる。それが昇華して文学になるーといえば自賛が過ぎるであろうか。

田上倉平　　小説「捨身」―聖徳太子の生涯より―

「麿も恋をしております。今年三十三歳になる麿が、十七歳の皇女にです」

「それは……」　　善蔵尼の眼ははちきれんばかりに丸くなった。

竹内菊世　小説「男狭磯」より

＜勝った＞

長邑第一の海人の誇りが、男狭磯の胸に突き上げてきた。見ると、大アワビは、桃の実ほどもあるかと思われる真珠を抱いていた。

＜麻夜が喜ぶ＞

朦朧とした意識の中で、男狭磯は麻夜の笑顔を見た。それが、男狭磯にとって最後の麻夜の姿だった。

西池冬扇　　小説「捨て身」―聖徳太子の生涯より―

雀は仏教を知らない。しかし、雀はしあわせであるに違いない。

正木孝枝　　小説「北灘炎上」より

せんは倒れた源之助の身体に取りすがって、将に死んでいこうとする恋しい人の名を呼び続けた。源之助は眼を開けた。その眼の中に、許して、とせんは叫び込んだ。

安曇統太　「阿波圏」より

小説を書かないでいる時間ほど、作家にとって空しいものはない。（中略）次の長編はどんな急いでも４・５年はかかるだろう。あるいは筆半ばにして斃れるかもしれない。それでもいい。斃れるまでの間、筆を握り続けたいと思う。そういう自分を省みると、文学は業だという言葉が、今しみじみと胸にくるのである。

鈴木綾子　「阿波圏」より

十二月の末、一通の公報が届きました。兄が戦病死したことを知らせる無情な公報でした。

兄は終戦の翌日、ニューブリテン島で死んでいたのです。翌日、兄の遺骨が帰ってきました。

それを胸に抱いて敷居をまたぐとき、無口な父が、ひと言、「清さん、家にもんたよ」と言いました。父の胸中には万斛の涙であふれていることを知りました。

上窪青樹　「阿波圏」より

写経する傍らにわく柚味噌かな

いつのころからかそんな俳句を記憶している。･･･ 中略 ･･･

写経の清浄心と、わく柚味噌の音の静寂さが、わたしをひきつけてやまないのである。

関眞由子　　小説「生口記」より

管弦が聞こえる。応羽の生存を祝福するかのように愉快な楽の音だ。
空は青い、海も青い、そして満帆の風。やがて北方に大陸が見えるだろう。

小川公三　　「阿波圏」より

小説というものは畢竟人間を描くものであり、その素材、山岳とか経済とか医学とか歴史はその踏み台に過ぎない。素材への切り込み方は深く正確であらねばならないのは当然だが、それぞれの専門家が満足いくほど書き込む必要はさらさらない。そんなことをすれば評論になっても小説にはならない。

辻本一英　「阿波圏」より

…ガラス越しに巡査が一人、じろりと少年を見つめているのだ。その冷たい目…。
〈あの巡査はさっきの少女の父親ではないか〉と少年は思った。巡査は知っている。いや、そんなはずはないと思いながら、少年はその前をどうしても通り抜けることができなかった。
少年はまるではじめからそうするつもりであったかのように交番の中に入っていった。

山口久雄　　「阿波圏」より

ブラックホールの去った後には、その体積を半減させた太陽が力なく輝いていた。地球の軌道は狂って長だ円になる。近日点では六十度の極熱地獄となり、数億の人類が溺死した。遠日点ではマイナス四十度の極寒が、太洋のすべてを氷結させて…残った生物はゴキブリだけだった。

船越淑子　「阿波圏」より

貧乏クジばかり引いてはいても、だれにも 迷惑をかけるでもなく、地道になにがしかの仕事をして生きている。それでいいのではないかと、得心する心境に 今はある。
「貧乏クジ万歳」。こういえば 貧乏人のやせ我慢に聞こえるだろうか。

東根泰章　「阿波圏」より

10 万冊売れたベストセラーがあるとする。この本を読むのに速読術などは別にして、少なくとも五時間はかかろうと考える。（中略）文章は読者の貴重な時間を大量に奪う。あだやおろそかに文章は書けないと思う。じっくりと腰をすえて、納得のいくいい文章を書きたいものである。

高木　純　　「阿波の歴史小説」第一集あとがきより

阿波を描くことは、阿波にいる作家のなすべき仕事であり、こういう他県に例をみない一本を成し得たことは、若干の不満や羞じらいを吹き飛ばして喜びは大きい。
（※昭和五十五年以来「阿波の歴史小説」は今も阿波の作家に引き継がれている）

渡辺恵子　「阿波圏」より

「身の毛がよだつものは、地震、交通戦争、邪馬台国観光、類型的な文章、陳腐な言葉」
と、二、三行で片付いてしまう。

萬宮千鶴子　小説「改新の女帝」のあとがきより

蘇我入鹿という七世紀の人物を、『悪人』として定着させたのは皇国史観による学校教育である。（中略）入鹿は果して悪人だったのか。

丁山俊彦　　小説「生口記」より

応羽は肺臓の中にその臭気が流れ込んで来てから、自分の意識がだんだん明瞭になっていくのを自覚した。少しも不快ではなかった。むしろ永い歳月渇望したものが与えられたような充足した感じだった。その臭気が、生命の象徴、生の息吹き、いや生命そのもののようにすら応羽には感じられたのだ。

丁山俊彦　　小説「男狭磯」より

海は男狭磯ら海人にとって生命そのものであり、父であり母であった。今までただの一度だって海をいまわしいなどと考えたことはなかった。海で生きる海人が、海をのろわねばならぬ今が、男狭磯は悲しかった。

藤原真智子　　「阿波の歴史小説」　―阿波の芸人―より

人生というものは、こうも有為転変ただならぬものかと、今さらのように自分の無知を思い知らされるのだった。

田中裕子　　「阿波の歴史小説」より

帝の遊びのために、なぜ死を賭して深みに潜る必要があろうか。わしは生きていたい。生きておればこそ、こんなにも美しい海の光景を見ることができるのではないか。

鈴木綾子　「阿波の歴史小説」第十集あとがきより

阿波の歴史と歴史上の人物を小説化することによって、印象的に大衆の中に浸透させ、もって郷土の文化向上を目指す」という当初の目的はほぼ達成できたと自負している。しかし私には秘められた目的があった。本を売った利潤をもって筆者へ何がしらの原稿料を支払う、という夢だった。